

111111のとも

創刊号（一月号）

『幸福な一生とは』

人間は誰でも不幸になるうと思つて生きている人はいません。しかし現実には不幸な一生だと思える人は実に多いです。

先日聞いた話ですが、大きな会社を経営する社長がガンであと一ヶ月のいのちと医師から宣告され、なぜ私が死ななければならぬのかと苦悶し、自分のガンが治せない現代の医学と医師の無能さをののしり、うらみながら予告どおり一ヶ月後になくなったそうです。

この人はおそらく、高い社会的な地位と多くの財産と名誉とを得ていたと思えます。誰から見ても幸せな一生であったと思えるわけですが、しかし、本当にこの人の人生が幸せな一生であったといえるでしょうか。「いな」と言わざるを得ません。

人間は、自分の存在や生活を自覚できる唯一の動物です。この社長さんも自分だけを頼りにして、一生懸命に会社を

盛り立て、苦勞しながら発展させてきて、自分でもよくやったと自らを評価していたことだろうと思つたのです。やつとこれから樂ができる矢先に、死が訪れてきたということだと思えます。

つまり、自らの人生を苦勞ばかりして死んでいかなければならないと自覚したというわけです。すると死んでも死にきれない。自分でどうにでもなつてきた人生が、終末に来て初めてどうにもならないものであることにぶつかつてしまつて、そのはがいなさにあがきながら死んでいった。

ワンマンのしつかり者でやり手であつただけに、自分でもうにもならないことが人に倍加して身にこたえたのだと思つたのです。不幸な人であつたと言わざるを得ません。

この社長さんの自覚の仕方は、これほど典型的ではなくても、多くの人が持つている自覚の仕方であるように思われます。つまり、多くの人が地位と財産と名誉を得て、健康で安樂な生活をしながら、天寿をまっとうして一生を終わりたいと思つていては、ではないでしょうか。

しかし、それを強く望み、それに依存した生活をしようとするほど、そうしたものを失つたとき、その人は自分の生きる意味も同時に失つてしまつたわけです。

おそらくこの社長さんも地位や財産や名誉ならば、たとえ失つてもそのバイタリティーの強さ、タフさで、再びは

い上がってくるかも知れません。しかし、いのちだけはいくらあがいても二度と授かることはないわけです。一回切りでもうおしまいなのです。

多くの人が、病気になったり、事故にあったり、死に直面したとき、はじめて人生のはかなさ、自分のいのちの限界を感じるようです。でもこの社長さんのように死を宣告されて一ヶ月ではそのことを悟ることもできなかったわけで、ほんとうにお気の毒な一生だったと思います。

しかし、人生の自覚の仕方は、上に述べたような仕方しかないわけではありません。次のように考えることもできるわけです。つまり、自分の生きているのちは、ただ仏様からお預かりして仮に自分が生きているだけであって、いつお返ししなければならぬか、分からないものなのであると。そしてそのお返しする時は、自分が決めるのではなくて仏様ご自身が決められることであると。

このように考えますと、自分にできることは、仏様からお預かりしたこの二度とない人生の一日一日を、せいっぱい生きていくだけなわけです。いつ終わるか分からない人生だからこそ、一瞬一瞬を大切に、自分にできるだけのことをひたすら行じて生きていく。その結果、地位や財産や名譽を得ることもあるであろうし、得られないこともある。しかしそのことには何ら心が左右されない。ただひ

たすら生かされて生きていく中に、生きていることの無上の喜びが一瞬一瞬感じられるようになるということなのです。

そう感じられるとき、明日のいのちにそれほど固執することはなく、いつでも安らかに死を迎えることができます。勿論、死は永遠の別れです。愛する者と別れて行かなければならない悲しさに涙を流すことはあるかも知れません。しかしそれは生に対する固執ではない。安らかな死であり、幸福な死であり、幸福な一生の終焉（いまわ）なのです。

ちよつと、難しく自分にはできそうにない話になってしまったかも知れませんが、でもこうなれたら素晴らしいとは思われませんか。そして誰でもこうなれるのだと聞かされたら驚かれますか。本当に誰でもこうなれるのです。あの社長さんのように見せ掛けは幸せでも、内実不幸な人は多いのです。人間だけが自分の内的基準で自分を自覚でき、

外部の誰からも奪われない、何事によっても崩れさらない幸せを自分自身の心の中に作り出すことができるのです。

この「こころのとも」は、そうした幸せを皆さんが作り出して行けるようお手伝い出来ればと思います。始めました。第一回目として、左記のように「幸福になる生き方十ヶ条」をお届けします。一つ一つが実行の難しいことかも知れませんが、でも、できるものから心がけてみてはいかががでしょ

うか。次号から降りにふれ、この一つ一つの内容なり、解説なりを書いて行きたいと思えます。ご批判、ご感想など頂ければ幸いです。

幸福になる生き方十ヶ条

- 一、人にはできるだけ物おしみせず、骨おしみしないこと。
- 二、どんな人にも感謝の心を忘れず、その人の幸せを願っていくこと。
- 三、腹が立つても、イライラしても、いやなことでも、じっと我慢して耐えること。
- 四、「人の心を感じる心」を養うように努めること。
- 五、「墮落」を戒めて身心を清らかに保つこと。
- 六、いつも自らに課題を課し、「星」を見つめて精進すること。
- 七、生き方のモデル（お手本）を持つこと。
- 八、日々、ヨーガ（禅定）、念仏、読経、お祈りに励むこと。
- 九、何事にもとらわれない「こころ」をもつようにすること。
- 十、今日一日生かされている「いのち」に感謝すること。

後記

一、平成元年十二月二十二日、京都醍醐寺において長時間の厳肅な儀式を通じ、わたしも真言宗醍醐派の僧侶として、伝法灌頂をうけました。密教ないし弘法大師さまとのめぐりあいの不思議に改めて感謝し、感激いたしました。わが観音寺では、父教章に次いで二人目です。

二、今月から、皆様に少しでもお役に立てればと思い、「こころのとも」を発行することにいたしました。どんな題にしようかとあれこれ考えたのですが、結局、上記のような平凡な題に落ち着きました。この題は私がこれまで勉強してきた「心理学」の最初の一字をとっています。また、この題には、私のささやかな願いが込められています。つまり、皆様の「こころ」が少しでもやわらぐような、休まるような、なごむような、ふるい立つような、勇気づけられるような、戒められるような文章を書きたいという願いです。またもう一つの願いは、今日の教育が「あたま」だけではなく「こころ」も大切にしてもらいたいというもの。人間は「あたま」だけではなく「こころ」と「からだ」の統合された人格として存在しています。「あたま」の所産である「科学」は今や人類を破滅へと導いています。もっともっとそれにふさわしい「こころ」が必要なのです。

日本も今や世界中から経済的搾取を行っています。こころをうしなっているからだと思えます。天罰が当たるのではないのでしょうか。そうしたことになるように、という私の願いがこの言葉に込められています。

さて、今後こうした願いが伝わるような文章を毎月、毎月書き続けられるかどうか、自信はないのですが、一生懸命精進していききたいと、覚悟を新たにしています。よろしくお見守り下さい。

三、走出山観音寺が建立されてもう一年八ヶ月たちました。その間皆様からいろいろのご支援をいただき、感謝いたしております。

活動として縁日の毎月十五日に、終日にわたる駄菓子のお接待と午前十時から三十分ないし四十分程度のご祈祷とをいたして参りましたが、今月からは、この「こころのも」の刊行と、ご祈祷後の「法話」およびその後での「靈能相談」ないし「悩みの相談」をも行つてまいりたいと考えています。どうぞご遠慮なくお申し出下さい。ご相談については個人の秘密が厳守されることを念のため申し添えます。

四、上記の「法話」の中で、私がこれまで十年来、毎朝十分から十五分程度行ってきたヨーガについて皆さんとこ一

緒に実習させて頂きます。ヨーガのことは「十ヶ条」の中の八番目にも挙げておきましたが、実にすばらしいものです。このヨーガのすばらしさについて、今後「こころのも」の中で述べて行きたいと思っています。

五、いつもお堂の中央の祭壇でご祈祷して下さいる人は、宮本龍憲師で、私に密教の修法を教えて下さった私の先生です。福山市東町桜馬場の大師堂というお寺で靈能相談やご祈祷をされています。ご希望があれば悪霊払いや入学祈願、交通安全や病氣平癒などの祈祷もして下さいます。靈験あらたかと聞いています。

月刊 こころのも	平成二年一月十五日 〒714
第一巻 創刊号 (一月号)	笠岡市走出一三六の一 真言宗醍醐派 走出山 観音寺 中塚 善成 <small>（善次郎）</small>

(注) 創刊号はもともと横書きだったのですが、二月号以降と合わせるため、縦書きに改めました。

